かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第５３号（令和８年３月）

朱蓮華盆（しゅれんげぼん）と名越弥七郎銘（なごしやしちろうめい）釣鐘（つりがね）

あゆむ「まだ少し寒いから、家で調べられるものは何かないかな。」

ミドリ「それで思い出したわ。前に、山形新聞に上山の文化財が紹介されていたわね。」

ふみお「あ、そうそう。“ふるさとの文化財”というシリーズで、確か“朱蓮華盆（しゅれんげぼん）”というものだったな。ほら、この新聞だ。」

あゆむ「ふうん、五つあるね。」

ミドリ「蓮華（れんげ）というのはハスの花のことよね。」

ふみお「お盆（ぼん）の縁（ふち）がハスの花びらのようだし、それに深みのあるいい朱色（しゅいろ）だな。」

あゆむ「金色の絵も描（か）かれているぞ。」

ミドリ「馬に乗っている身分の高そうな人、それに、後ろには宮殿（きゅうでん）のような建物みたい。新聞には“中国製”と書いてあるわね。」

ふみお「何となくそんな感じがするね。中華料理店（ちゅうかりょうりてん）で見かけるようなふんいきがある。」

文じい「今は、上山城に預けられておる。」

朱蓮華盆

ミドリ「ところで、新聞には、“戦功の証、上山藩主の宝”とあるけど・・・。」

ふみお「戦功ということは、戦いで手柄をたてること。証とはその証拠ということだね。」

文じい「ふむ。『かみのやまの文化財』という図録にも説明がのっておるぞ。」

ミドリ「藩主というのは、殿様のことね。」

文じい「そう、三河国藤井村から来られた松平家じゃ。それで“**藤井松平**”と呼ぶ。明治の時まで上山を治めておられた。」

ミドリ「手柄ということは、戦いで活躍し、それで勝利したということね。」

文じい「“戦利品”、つまり、戦いの相手が亡びたり逃げていったりした後、貴重なものはいただいてきたということになる。」

あゆむ「ところでどんな戦いだったのかな。」

文じい「ふむ。織田信長が、室町幕府の将軍足利義昭を支えて京都に向かう時、近江(滋賀県)の六角氏と戦いになった。」

ふみお「“**箕作城の戦い**”と言われるのだね。」

ミドリ「その戦いで松平家が活躍したのね。」

文じい「ふむ。いろいろな記録があるが、先陣は木下藤吉郎秀吉たちであったようだ。」

あゆむ「お、あの有名な、秀吉？」

文じい「そう。しかし守りが固くてなかなか攻めきれなくていた。そこに、徳川家康に派遣されて１千の軍勢を率いる**松平家２代目勘四郎(信一)公**が、討ち死に覚悟で敵勢を城内に押し込めたそうだ。」

ふみお「そうなると勢いが出るね。」

ミドリ「それで勝利したというわけね。」

文じい「信長の天下統一への大きな一歩となった。」

あゆむ「それじゃあ、ほうびもいただいたろうな。」

文じい「ふむ、その通りで、信長が身に着けていた脇差(刀)と革製の陣羽織をいただいたということだ。」

ふみお「図録を見ると、戦利品は他にもあるね。**釣鐘**だ。“**名越弥七郎銘**”のもので、確か今は、市内の方がお持ちだとか。」

釣　鐘

文じい「そう、大事に保管されておる。よく見ると、釣鐘の口の縁まわりに次のように字が彫られている。

“**御鋳物師洛陽釜座住**”

“**名越弥七郎藤原三知**”

名越家はこの時代の有名な釜師だ。」

ふみお「それから、浄光寺さんで前に見せてもらったことがある、“**松平家牌所阿弥陀如来立像**”もその時の戦利品ということだったよね。」

文じい「その通り。よく思い出したな。」

ミドリ「ふうん。宝物にはいろんな歴史があってそれで今の上山に残されているのね。」

発行：　上山市教育委員会生涯学習課生涯学習係　　電話　023-672-1111